

PICK UP MOVIE

『ボイリング・ポイント／沸騰』

[2021年／イギリス／英語／95分] PG12

製作・監督・脚本：フィリップ・バラントニー
出演：スティーヴン・グレアム、ヴィネット・ロビンソン、
レイ・パンサキ、ジェイソン・フレミング、タズ・スカイラー

高級レストランの厨房から、 現代の労働を問い直す



美味しいものを食べたい。いい気分ですっきりとくつろぎたい。誰しものが抱くこんな望みをかなえるには、その陰に苛酷な労働を強いられる人がいる。そういう現実からなるべく目をそらして日々を送るのが、私たちの日常になってしまっていないか。

お金を払って快適さを手に入れるのは当然という私たちの意識に、思わぬ一撃を食らわせてくれるのが、この映画「ボイリングポイント／沸騰」だ。

ロンドンの高級レストラン。クリスマス前の金曜日の夜。今日こそ贅沢な晩餐を楽しもうと客が押し掛ける。大枚を支払う代償とばかりに、わがままな要求を突きつける客も多い。殺気立つ寸前の厨房に遅刻して駆けつけたのはこの店の看板シェフ、アンディだ。だが実は彼は、私生活のトラブルのせいで心身共に最悪の状態だった。腕っこきの料理人だってやはり生身の人間なのだ。

厨房やフロア担当のスタッフがそれぞれ持ち場を固めて、続々と入る注文を秒単位でこなしていく。ひとりずつ性格、クセ、考え方、嗜好が違うから、細かい衝突は絶え間なく起きる。そのうえ、この忙しい日に限って難題がいくつも降りかかる。さてアンディはこれらを乗り切ることができるのか。

高級レストランのスタッフの多難な一夜は、驚いたことに90分のワンショットで撮られている。制作にあたってはもちろん脚本を練り、入念なりハーサルを重ねたという。さらに撮影時には当意即妙なアド・リブも加わって、全篇に臨場感があふれている。一見華やかなレストラン業界の裏側には、現代社会のあらゆる問題が渦巻き、働く人は疲弊している。それを斬新な手法で描き切ったことで、この一作は現代の労働とはどうあるべきかを問い直す力強いものに仕上がった。

ほぼ同時に上映されるフランス映画「デリシュ」は、時代背景も物語もまったく違うが、美食を作る側の人を描いているという共通点がある。見比べてみると面白いと思う。